サムエル記第一（2）

「ハンナの祈り」

1 サム 1：9～18

1. 文脈の確認

Ⅰ．王政に向けた準備（1～9 章）

A. サムエルの誕生と幼少期（1 章）

1. サムエルの家族（1：1～8）
2. ハンナの祈り（1：9～18）
3. サムエルの誕生（1：19～28）

2. 注目すべき点

（1）士師の時代の末期、イスラエルは政治的にも霊的にも、混乱状態にあった。

（2）新しい時代を導くのは、預言者サムエルである。

（3）前回は、神の御業は小さなことから始まるということを学んだ。

（4）今回は、サムエル誕生の経緯について学ぶ。

命題：イスラエルの民は、霊的刷新を必要としていた。

この個所に記された 3 つの対比が、そのことを示している。

Ⅰ．立ち上がる女 vs.座っている祭司（9 節）

1. 9 節

1Sa 1:9　シロでの飲食が終わった後、ハンナは立ち上がった。ちょうどそのとき、祭司エリは【主】の神殿の門柱のそばで、椅子に座っていた。

（1）この物語は、士師の時代の終わりに位置づけられている。

①イスラエルは道徳的にも霊的にも混乱した状態にあった。

②「人々は皆、自分の目に正しいと見えることを行っていた」

③そのような時代に、神は新しい器を準備しておられた。

（2）「ハンナは立ち上がった」

①これは単なる動作ではない。

②彼女は、祈る決断、神のもとへ出て行く決断を下した。

（3）「祭司エリは【主】の神殿の門柱のそばで、椅子に座っていた」

①「座っていた」は、ある種の受動性や無感覚さを象徴している。

②形式的には正しい場所にいながら、神の臨在に対しては無感覚である。
③これは、当時の祭司制度全体の霊的な鈍さを象徴している。

(4) 教訓
①神は、信仰によって「立ち上がる者」を用いられる。
②時代を変えるのは、地位や資格ではなく、信仰と行動である。

II．祈る女 vs.鈍感な祭司（10～13 節）

1. 10 節

1Sa 1:10　ハンナの心は痛んでいた。彼女は激しく泣いて、【主】に祈った。

(1) ハンナという一人の信仰者の涙と祈りが、歴史の流れを変える。
①「心の痛み」と「涙の祈り」は、苦難の中で希望を見いだすヘブル的信仰の型。
②詩 6 篇、42 篇

(2) 激しく泣く祈りは、メシアの系譜の起点となった。
①ハンナの涙
②サムエル誕生
③預言者制度の幕開け
④ダビデ王朝
⑤メシアの系譜

2. 11 節

1Sa 1:11　そして誓願を立てて言った。「万軍の【主】よ。もし、あなたがはしための苦しみをご覧になり、私を心に留め、このはしためを忘れず、男の子を下さるなら、私はその子を一生の間、【主】にお渡しします。そしてその子の頭にかみそりを当てません。」

(1) この請願は、万軍の【主】への呼びかけである。
①サムエルの誕生は、イスラエルの霊的・軍事的刷新の第一歩となる。
②この請願は、神の主権への信頼の表明である。

(2) ナジル人の請願に似ている。
①「頭にかみそりを当てません」は、ナジル人の外的しるしの一つである。
②期間限定ではなく、「一生」という点で、この請願は特異なものである。
③祈りの質の転換が見られる。
＊神の栄光のために子を求めた。
＊サムエルは、預言者・祭司・士師として霊的刷新をもたらす。。

(3) 教訓

①神の栄光をゴールとする祈りは、聞き届けられる。

②神の主権的働きと、それに応答する人間の信仰は、両立する必要がある。

3. 12～13 節

1Sa 1:12　ハンナが【主】の前で長く祈っている間、エリは彼女の口もとをじっと見ていた。

1Sa 1:13　ハンナは心で祈っていたので、唇だけが動いて、声は聞こえなかった。それでエリは彼女が酔っているのだと思った。

(1) ハンナの祈りの革新性

①個人が神に直接、静かに祈るというスタイルは斬新である。

②「心で祈っていた」は、旧約時代では極めて異例な表現である。

③沈黙の祈りは、人には理解されにくいが、神には届く。

(2) エリの誤解

①当時の祭司制度は、霊的識別力を失っていた。

②祭司エリは、ハンナが酔っていると誤解した。

③祈る者 vs.見る者の対比は、鮮明である。

④時代は、新しい啓示の受け手となる預言者を必要としていた。

Ⅲ. 全的信頼 vs.部分的理解（14～18 節）

1. 14～16 節

1Sa 1:14　エリは彼女に言った。「いつまで酔っているのか。酔いをさましなさい。」

1Sa 1:15　ハンナは答えた。「いいえ、祭司様。私は心に悩みのある女です。ぶどう酒も、お酒も飲んではおりません。私は【主】の前に心を注ぎ出していたのです。

1Sa 1:16　このはしためを、よこしまな女と思わないでください。私は募る憂いと苛立ちのために、今まで祈っていたのです。」

(1)「いつまで酔っているのか」

①叱責的ニュアンスが込められている。

②「あなたの上からぶどう酒を取り去れ」（直訳）

③これは、霊的リーダーによる権威の誤用である。

④エリは、神の宮で起きている真実な霊的行動を見抜けなかった。

⑤神の宮の管理者が、儀式的・外面的役割しか果たしていない。

⑥霊的リーダーの腐敗と信仰者の叫びの対比は、鮮烈である。

(2)「いいえ、祭司様」

①「いいえ、わが主よ」と丁寧なことばで応じた。

②「私は【主】の前に心を注ぎ出していたのです」

③液体をこぼすように、心の奥底まで神に明け渡していた。

④レビ人でも預言者でもない、ただの苦しむ信者の個人的な祈り

⑤自己の最も深い部分を差し出すのは、詩篇の祈りの型である。

(3)「このはしためを、よこしまな女と思わないでください」

①「ベリヤアルの娘」(ならず者の女)

②ハンナは自分のことを「はしため」と称した。

③彼女は、道徳的攻撃に対して明確に反論した。

④エリの誤解の深刻さが浮き彫りになる。

(4) 教訓

①いわれのない批判を受けたなら、丁寧なことばで応じる。

②道徳的攻撃に対しては、明確に、毅然とした態度で反論する。

2. 17 節

1Sa 1:17　エリは答えた。「安心して行きなさい。イスラエルの神が、あなたの願ったその願いをかなえてくださるように。」

(1) エリの態度は一変した。

①霊的鈍感さからの部分的回復

②「安心して行きなさい」→「平安（シャローム）のうちに帰りなさい」

③神の祝福を代弁する者へと変えられた。

④神は、不完全な者をも用いられる。

3. 18 節

1Sa 1:18　彼女は、「はしためが、あなたのご好意を受けられますように」と言った。それから彼女は帰って食事をした。その顔は、もはや以前のようではなかった。

(1) へりくだったことばで、エリに別れを告げた。

①彼女は、通常の生活に戻った。

②食事をした。顔は以前のようではなかった。

③心の状態が変化したのである。

④祈りの答えは得ていないが、エリのことばを答えの保証として受け取った。

(2) 教訓

①平穏な日常生活の回復は、内面の平安から始まる。

②神のことばに全的信頼を置くなら、内面の平安が与えられる。

結論：今日の信者への適用

1. 立ち上がる

(1) 信仰の停滞を拒否する。

(2) 心の一新によって、信仰的な行動を開始する。

2. 心を注ぎ出す

(1) 形式ではなく、真実な心で神に向かう。

(2) 形式的な祈りを捨て、誠実な祈りを献げる。

3. 委ねる

(1) 神の栄光を第一に願う。

(2) 祈りの答えを神に献げる決心をする。

4. 平安に生きる

(1) 答えを見ずとも神を信頼する。

(2) 万軍の【主】に不可能はない。